

全労済協会 慶應義塾大学寄附講座

「公共私による新しい福祉価値の創造－新しい福祉価値をどのように生み出すか－」

講義日：2023年10月31日

「現代社会のウェルビーイング： 経済成長・格差・地域との関わり」

京都大学人と社会の未来研究院 院長・教授 内田由紀子 氏

■ウェルビーイングとは個人を取り巻く場が継続的に良い状態であること

私の専門は心理学で、特に社会心理学の分野で研究を行ってまいりましたので、そのバックグラウンドに基づいてお話をさせていただきます。

ウェルビーイングとは何か。これは、経済だけではなく、心の充足や、生活への評価・感情・価値を捉える新しい物差し・コンセプトです。「幸せ」が個人の短期的な状況評価に関わるものだとすると、ウェルビーイングはより包括的で、個人のみならず個人を取り巻く場や状態が、持続的に良い状態であることを指しています。自分だけではなく、家族や友人、自分の住む街や国が、どうすれば良い状態でいられるかを考えることであり、個人の感情を超えたところにあるものです。しかし、今が楽しいという個人の幸福を排除するものではありません。個人の幸せを包含するものであり、それを出発点として将来に希望が持てるか、地域の幸せを願うか、社会を良くしていきたいかといった公共性にまで深化していくものです。公共政策や環境経済といったことを考えるときに、広いウェルビーイングの捉え方が非常に重要になってくるのです。

■多様なウェルビーイングのあり方を認めよう

ウェルビーイングを考える際の注意点は、1.重要なのは人生の意義や生きがいであり快樂ではないこと、2.ウェルビーイングの意味は国や地域の文化によって異なること、そして3.多様なウェルビーイングのあり方を認めること、です。多様性について説明すると、ウェルビーイングが山頂にあるとしたら登り方はさまざまです。多様性や許容性のキャパシティがある山（社会）は、そこで暮らしている人も幸せですが、ルートが一つしかない山（社会）の状態はしんどいですよね。同じ山道に人が殺到し、競争が始まります。一つのルート、一つの価値観に縛られると、そこから解放されるのがとても難しいことは文化心理学の知見からもわかっています。特に日本社会においては、当たり前だと思っていることを外す抵抗感や、人に何かを言われたくないという思いが強いんですね。例えば、母親が子供に手作りの料理を作ることが愛情のシグナルだという価値観が強く浸透してしまうと、料理が作れないことに罪悪感を抱いてしまう人が多くなってしまいます。その価値観に縛られてしまうのは、ウェルビーイングな状態ではありません。料理を作ることという行動レベルよりも、本質的には、親の愛情が伝えられるかどうかの方が大切なのです。「ウェルビーイングには多様な形がある」と言えることは、これからの社会の成長にも関わってくる大切なことだと私は感じています。

■北米型の獲得的幸福と日本型の協調的幸福

幸福についての研究は、1980年代から始まりました。これは「個人の幸福」についての研究で、主に北米を中心とした研究です。そこでは、幸福な人物とは「若く健康で、良い教育を受けており、収入が良く、外交的・楽観的で、自尊心が高く、働く意欲がある者」とされています。こうした北米的な幸福感は、非常に獲得的であるといえます。背景には開拓の歴史、フロンティア・スピリット、移住者が多いといったことがあると思いますが、要は流動性が高い社会の価値観です。流動性が高い社会とは、引っ越しや転職もしやすい選択肢の多い社会ともいえますが、選択肢が多いということは競争と裏表の関係にあり、選び・選ばれる社会ともいえます。ここで生まれた獲得的幸福感に対し、日本の幸福感は他者とのバランスを重視し、人並み志向で、回りまわって自分にも幸せがやってくるという協調的幸福感だといえます。日本における幸福の意味も独特で、文化的な価値観からか、幸せ過ぎることを求めません。幸福度に関する調査ランキングでも日本は世界の中で低いです。北欧はランクが高いのですが、では北欧の福祉政策を導入すれば日本の幸福度は上がるかといえば、話はおそらくそう単純ではありません。幸福の価値観が違うからです。

これまでの獲得的な価値観に基づく幸福感の尺度ではなく、自分だけではなく周りの人も楽しい気持ちでいると思うか、平凡だが安定した日々を過ごしているかといった日本的な協調的幸福感の尺度を使うと、日本の幸福度は他の国と大体同じレベルになります。これは、穏やかな幸福を望む人が日本だけではなく世界にもいるため、こうした尺度がこれまでの調査では用いられてこなかったということです。いろいろな尺度で多面的に測定することが大事だと思います。

経済と幸福という点で、GDPと幸福度の関係を見ると、GDPが上がっても幸福度は途中から頭打ちになります。お金は必要ですが、常に右肩上がりであり続けるということにはならないんですね。アメリカにおける収入格差と幸福感の調査では、経済格差が幸福感にとってマイナスの要因になっていることがわかっています。日本における世帯年収別の総合主観満足度調査でも、世帯年収が低いと幸福度が低いことがわかっていますが、年収が上がれば幸福度が上がるかという点と、1000万円から2000万円のピークを超えると幸福度はあまり変わらないことがわかっています。こうしたことから、幸福度を上げるために経済を追求するよりも、格差をなくす方向にシフトした方が、国としては効率が良いともいえます。

■個のウェルビーイングから場のウェルビーイングへ

世界は今後、個のウェルビーイングから場のウェルビーイングを考える時代にシフトします。どうやって格差を減らすか、どうやって持続可能な社会を作っていくかということです。こうした中で求められているのは、自分の状態が良くなるのが、周りに良い影響を与え、それが広がって社会を良くするというウェルビーイングの循環です。競争社会では自分が良くなることで他者の状態が良くなるという、この部分のパスがうまくいきません。しかし、多様な人が多様なやり方で幸せを追いかけ、それを包摂する社会では、他者の幸せが自分に良い影響を及ぼすことは当然あり得るわけで、社会が単純な競争でなくなればできることなのです。その時のキーワードは、信頼と多様性です。ウェルビーイング社会の実現のために、個人は寛容さを身につけること、社会や行政は規範の醸成や格差を解消することが必要ではないかと思います。

<文責：全労済協会調査研究部>